



学校名: 埼玉県立伊奈学園中学校

氏名: 島村 勲

[担当教科: 社会]

● 実践教科等: 社会科(地理的分野)

● 時間数 : 5時間

● 対象生徒 : 1年生

● 対象人数 : 80人

1 単元名

アフリカの人々の暮らしとその変化

2 単元の目標

・様々な形の国際協力・国際貢献があるが、それらの意義や関係性について、批判的に考える。

(批判的に考える力)

・将来の理想的な世界をイメージし、その実現のためにできることを考える。

(未来を予測して計画を立てる力)

・「アフリカ州」という地域を、多面的・多角的に分析することで、その地域的特色を理解する。

(多面的、総合的に考える力)

・国際協力・国際貢献が本当に必要なのか、必要であるとすればどのようなあり方が望ましいのか、友達と互いの考えを交流しながら自分の考えを広げたり深めたりする。

(コミュニケーションを行う力、他者と協力する力)

・遠く離れたアフリカ州の国々と日本は、様々な面で結びつき、相互依存の状態であることを理解する。

(つながりを尊重する態度)

・持続可能な世界の実現のため、自分たちにも責任や義務があることを認識し、その実現のために今の自分たちにできることを考え、行動に移そうとする態度を身に付ける。

(進んで参加する態度)

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

・アフリカ州には東西南北それぞれ多様な自然環境や伝統・文化、産業などがあり、一つの国においても、多様な民族、言語、宗教などが存在・共存している。【多様性】

・グローバル化が進んだ現代社会においては、アフリカ州の国々と日本や世界各国は相互に深い関わりをもっている。【相互性】

・アフリカに埋蔵している様々な資源は有限であり、地球環境も考慮した持続可能な開発・社会という側面を視野に入れた利用が必要である。【有限性】

・アフリカの国々は歴史上欧米列強の植民地となり一方的に様々な資源を搾取されてきたが、平和で民主的な世界の構築のためには世界各国が連携し、自国の責任を認識し、公平な貿易体制を再構築していく必要がある。【公平性、連携性、責任性】

4 単元の指導について

(1)教材観

本単元は、学習指導要領地理的分野内容(1)世界の様々な地域 ウ世界の諸地域 (ウ)アフリカをうけて設定した。ここでは、それぞれの州内で暮らす人々の生活にかかわり、かつ我が国の国土の認識を深める上で効果的な観点から州内の特色ある地理的事象を基に主題を設定し、その追究を通してそれぞれの州の地域的特色を理解させることが主なねらいである。

アフリカ州は、多くの日本人にとって、距離的・精神的に遠く離れた存在であり、自分たちの生活との関わりをあまり感じる事ができない地域である。(→相互性感覚の欠如) また、アフリカへのイメージは貧困、紛争といったものや、草原、野生動物などテレビや雑誌で取り上げられるような一面的なものが多い。(→多様性感覚の欠如) そこで、本単元では、写真資料や私自身が海外研修で見聞きした多様なアフリカの姿を認識させるとともに、アフリカの国々と日本や世界各国が深く結びつき、相互依存の関係にあることを気づかせる。また、アフリカの国々が貧困や紛争の連鎖から抜け出すことができない理由を、先進国によって人為的に作られたモノカルチャー経済という構造を通じて理解させていく。(→鉱産資源の有限性、資源利用の公平性) そして、モノカルチャー経済の上に、いまの日本人の物質的に豊かな生活が成り立っているということにも気づかせ、問題意識を育成していく。

さらに、日本国内においては少子高齢社会の到来や景気の低迷によって多額の国債を抱え、東日本大震災をはじめとする自然災害からの復興なども遅々として進まない状況の中、国際協力・国際貢献に積極的に取り組む必要性と、どのような国際協力や国際貢献の姿が望ましか考えさせる。(→連携性、責任性)

(2)生徒観

アフリカ州は、アジア州やヨーロッパ州と比べ生活の中で自分たちとのつながりを感じにくく、事前アンケートを見てもその実態をうかがうことができる。(アンケートは、2クラス 80 人の結果を集計)

①アフリカと聞いて思い浮かべるものやイメージは？(複数回答可)

砂漠(52人)、野生動物(41人)、暑い(41人)、ピラミッド(24人)、サバンナ(21人)、黒人(15人)
ジャングル(15人)、紛争(14人)、自然(12人)、民族(11人) など

②知っている国は？(国名と位置が一致するもの)

南アフリカ(65人)、エジプト(63人)、マダガスカル(19人) など

③アフリカの国に行きたい？

行きたい(22人)→ピラミッドなどの世界遺産を見たい、野生動物を見たい、色々な文化を見たいなど
行きたくない(52人)→治安が悪い、暑い、環境が悪い、病気が心配、紛争、動物に襲われるなど

④生活の中でアフリカとのつながりを感じることは？

ある・・・37人、ない・・・37人 つながりを感じるもの・・・チョコ、コーヒー、募金

(3)指導観

私たちが生きている社会は多様であり、様々な人や事象が複雑に絡み合って成り立っている。

本単元で取り上げるアフリカ州も 54 の国からなっている。その中の一国であるザンビアに 10 日間滞在しただけで、語りつくせないくらいに多様な面を見ることができた。このような前提に立って、ザンビアを通して、アフリカの地域的特色というものを多面的・多角的に捉えさせていきたい。

授業では、距離的にも心理的にも遠いアフリカ州の国々を、自分たちと関わりのある国々であると認識させること、そして様々な問題を当事者意識をもって受け止めることができるように、ザンビアでの写真や体験談を活用していく。アフリカ州の社会的事象について正しい認識をさせる際には、諸資料の正確な読み取りに加え、話し合い活動を積極的に取り入れていく。資料を正しく読み取っているか、資料にはどのような意図が隠されているのか、読み取った事実から得た解釈は正しいのか、他の解釈はないのか、その解釈はどのような価値を背景としているのかなどを、互いに批判的に考えさせていきたい。

そして、ザンビアでのJICAの支援内容をもとに、日本の国際協力の特色を追究させていく。中学校 1 年生であるので、日本の国際協力の現状や特色を理解することを目標とし、中学校 2 年生、3 年生と学年進行していく中で、日本のあるべき国際協力のあり方について考える土台を育成していきたい。

5 評価基準

観点	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
評価規準	アフリカ州の地域的特色や日本の国際協力に対する関心を高め、それを意欲的に追究し、捉えようとしている。	モノカルチャー経済下の人々の生活という主題をもとにアフリカ州の地域的特色と日本の国際協力を多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。	アフリカ州の地域的特色について、読み取ったり図表などにまとめたりしている。	モノカルチャー経済下の人々の生活という主題を基に地域的特色を理解し、その知識を身に付けている。 日本の国際協力の特色を理解している。
評価方法	観察法 ワークシート	ワークシート	ワークシート	ワークシート ペーパーテスト

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	アフリカ州の基礎・基本	アフリカ州の基礎的・基本的知識を習得し地域的特色を大観する。	位置、国名、地形、気候、宗教、言語、人口、歴史など、アフリカといっても、国や地域によって、更には一国内においても多様性があることを、ザンビアでの経験を通して伝えていく。
2	国際協力1	日本は積極的にアフリカ支援に取り組むべきかどうか考える。	アフリカと日本の現状を、資料を通じて捉えさせ、アフリカ支援に積極的に取り組むべきか、国内政策を優先させるべきか考える。 アフリカ諸国と日本の相互依存関係や日本の国際社会における責任等を理解させる中で、支援の必要性を捉えさせていく。
3	アフリカ州の産業	アフリカの多くの国々がモノカルチャー経済という構造の中で経済成長を虐げられているという状況を理解する。	アフリカのプランテーション農業（カカオやコーヒーなど） 豊富な鉱産資源（銅、コバルトなど）
4	アフリカ州の貧困	アフリカ州の国々の多くが様々な要因が絡み合って貧困から抜け出せないことを理解する。	アフリカの貧困の原因を水、教育、医療・衛生環境、食糧などの視点から考える。
5	国際協力2	国際協力には様々な形や方法があることを知る。	『「援助」する前に考えよう』の「一枚の看板」のワークショップを行い、国

			国際協力のあり方について考える
6	国際協力3	日本の国際協力の特色を知り、今後の支援のあり方について考える。	ザンビアでのJICAの支援を分類させたりランキングさせ、日本の国際協力の特色を考え理解する。

7 授業事例の紹介

小単元名 【国際協力3】

(1) 指導案

(ア)実施日時 10月28日(水)第4限

(イ)実施会場 1年1組教室

(ウ)本時の目標

ザンビアにおけるJICAの支援活動を通して、日本の国際協力の特色を考え、これからの日本の国際協力のあり方について考える。

(エ)指導のポイント

- ・前時のワークショップを通して気づいた国際協力における様々な支援の方法を参考とする。
- ・ザンビアで実際に目にした支援活動を紹介しながら、日本の国際協力の特色を考えさせる。
- ・未来の理想の世界をイメージし、それに近づくための必要な支援について考える。

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
5分	ザンビアの現状を説明	教師の説明を聞く	一斉	ザンビアの現状に関する写真を提示する。	
5分	支援カードを分類することを説明	支援カードの分類基準を考える	グループ		
3分	カード内容の説明	教師の説明を聞く	一斉	無償資金援助、有償資金援助、技術協力に分類できることを示す。	
5分	無償資金援助と有償資金援助のメリットとデメリットを説明	なぜ無償資金援助ではなく、有償資金援助なのか考える	グループ	無償資金援助のデメリット、有償資金援助のメリットを考えさせる。	
9分	グループの進行状況に応じた声かけ等	優先順位の高い順に援助カードを3枚選ぶ	グループ	選択基準(優先したい価値)を明確にさせる(命に関わること、生活を豊かにすることなど)	
5分	支援される側の意向も聞きながら支援の在り方を考えることを説明	グループの準備を発表し、その違いをどう調整すればよいか考える	グループ	前時のアイ子の援助を参考にさせる。(ザンビアの人たちの要望を聞き、日本の提案も含め、両者の合意の上で支援をする)	
10分	ザンビアでのJICAの支援内容説明	教師の説明を聞く	一斉	ザンビアで実際に見た支援を中心に、それぞれの支援の目的や、支	

8分	個人の進捗状況に応じた声かけ等	日本の国際協力の特色についてまとめる。	一斉	援のつながりなどを説明する。 中学校1年生段階での考えなので、世界のような問題を解決することは簡単なことではないという実感を持たせる。	日本の国際協力の特色について理解している。(ワークシート6)
----	-----------------	---------------------	----	--	--------------------------------

(2) 授業の振り返り

1時間で実施するには学習内容・学習過程が多く、生徒が個人で思考して自分の考えを持つ時間、グループで思考を深める時間、クラスで思考を共有する時間が十分に確保することができず、思考の深化や広まりを持たせることが不十分であった。また、教師がJICAの支援の特色について積極的に評価するような説明をしたために、支援内容については理解できた生徒がほとんどであったが、その支援の在り方や内容について無批判に受け入れ、評価してしまう方向に生徒の思考が流れてしまった。JICAの支援方針や内容を認識した後に、それを各自で評価する時間を確保すべきであった。その時間を確保することで、今後の日本の国際協力のあり方、今の自分たちには何ができ、将来的には何ができるのかという意思決定、さらには社会参画まで視野に入れた授業展開とすることができると考える。今後も中学生に国際的な問題意識を持たせ、義務教育終了までの3年間の社会科で継続的に地球市民としての感覚や視点を育成していきたい。

(3) 使用教材

電線の整備や発電事業に資金を貸し出す。	隣の国との国境の川に橋を作る資金を貸し出す。	新種のウイルスの診断方法を開発・予防するために専門家を派遣する。	給水施設を運営・維持管理していくために、専門家を派遣する。	授業の方法や教材の作り方などを教えるために、専門家を派遣する。
新しい道路を作ったり、排水路を設置したりするための資金を提供する。	ワクチン保存用の冷蔵庫やコールド・ボックスを贈与する。	教育の質の向上を図るため、資金を提供する。	井戸を作ったり、大規模な給水施設を作ったりするための資金を提供する。	病院建設の資金を提供する。

ザンビアの現状

- ①主要道路は整備されているが、横道に入ると整備されていない道ばかりで、雨季には交通困難が生じる。また、排水路も整備されていない。排泄物などから感染症が多発する。
- ②内陸国の経済発展のため、橋や道路の整備は非常に重要である。しかし、橋がなかったり、道路や橋が古くなり、危険な状態のまま放置されているものも多い。
- ③電力が通っている都市部でも電力不足が続ぎ、毎日2時間の計画停電が実施されている。
- ④農村部で安全な水を利用できる人は50%で、汚染された水を飲んで感染症にかかる人が多い。水くみは女性や子どもの仕事で、学校に通えない子どもも多い。
- ⑤平均寿命は48歳で、特に乳幼児の死亡率が高い。死因の多くは感染症となっている。病院や医療スタッフの不足、ワクチンの保管方法など、多くの課題を抱えている。
- ⑥アフリカにはまだ発見されていない感染症がたくさんあり、鳥インフルエンザやエボラなど、人と動物の両方に感染する感染症に対する診断体制や予防システムが確立されていない。
- ⑦人口の7割が農業で生活しており、多くが小規模農家である。主食のトウモロコシ生産は生産性が低く、干ばつや洪水などの自然災害で何度も食料不足に直面してきた。
- ⑧企業の多くは中小企業であり、企業間の競争は少なく、生産性も低い状態である。
- ⑨東南部アフリカの14か国の中でも学力はかなり低く、先生の授業能力不足が原因と考えられている。

ワークシート6 日本国際協力3

課題 日本国際協力(国際貢献、援助)の特色は?

(1) 日本は援助は無償資金協力、有償資金協力、技術協力に分けることができる。すべてが無償資金協力ではなく、有償資金協力もある理由を考えよう。

無償資金協力のデメリット	有償資金協力のメリット

(2) 優先順位の高い支援カードを3つ選び、どのような基準で選んだのか、その理由を書こう。

個人	1位	2位	3位
グループ	1位	2位	3位

(基準・理由)

(3) 優先順位の違いを解消し、支援を効果的に実施するためにどうすればよいと考えよう。

(4) 日本の支援の特色をまとめよう。

(5) アフリカ州の国々が貧困から抜け出すために、どのような支援が必要と考えよう。

(4) 参考資料等

- ・『国際協力機構 年次報告書 2015』国際協力機構、2015
- ・『世界の国 1位と最下位』眞淳平、岩波ジュニア新書、2015

- ・『新・現代アフリカ入門』・勝俣誠、岩波新書、2013
- ・『アフリカ・レポート』松本仁一、岩波新書、2012
- ・『池上彰のアフリカビジネス入門』池上彰、日経BP、2013
- ・『ケータイの一生』、『若者と学ぶESD・市民教育』『開発教育実践ハンドブック』『市民学習実践ハンドブック』、『「援助」する前に考えよう』 開発教育協会
- ・『読売新聞』2015年9月30日、朝刊、「途上国の生活支援強化」「アフリカ支援で米に対抗」
- ・『読売新聞』2015年10月4日、朝刊、「22か国に人材育成拠点 『カイゼン』『高専』伝授」

8 単元をととした生徒の反応/変化

授業前の生徒はアフリカ州への支援について積極派は少数であったが、授業を実施していく中で、積極的な支援を行うべきとする生徒が増え、日本の国際協力の特色について多面的・多角的に捉え、深く理解することができるようになってきた。

《課題「日本の国際協力の特色をまとめよう」に対する生徒の答え》

◇その国の先々まで考えている。ずっと先に、現地の人たちだけでも、国のシステムを運営することができるように、その国に最適な方法でその国の将来までずっと幸せが続くように考えられていて日本らしいなと思いました。

◇近い未来の発展だけではなく、その発展が遠い未来の世の中でも続くようにしているのが特色。

◇被支援国の実際の要求に耳を傾け、技術協力なども交えながら相手国の自助努力、発展を促す相手の立場にたった支援。

◇教えた人たちが退去しても、教わった側がそれを続けることができる、また次の世代に引き継ぐこともできる支援をしている。

◇一方的な支援ではなく、相手国が目指す姿を理解して、現地の人たちに何をしたらいいのか、日本の支援が打ち切られた時のことまで考えて支援をしていると思いました。

◇日本は「やってあげる」だけではなく、「支援してあげる国に考えてもらい、それに協力する」というふうにして協力している。それは日本が協力できなくなった時に、日本が支援していた国が何もできないという状況にしないためだと思った。

◇どうすればいいのかを一緒に考え、きちんと最後まで寄り添う姿勢を大切にしている。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

派遣前から日本の国際協力のあり方、ODAの使われ方に着目した授業実践を計画していた。特に他国と比較した日本の国際協力の特色やその正当性、意義などを考えていきたいと計画していた。研修中は日本の支援がどのように現地の人々に評価されているのか、本当に人々の生活の向上に役立っているのか、一方的な押し付けの支援になっていないのか、というような視点をもって視察をした。研修後は、私見や個人的な評価は保留しつつ、実際に見聞きしたことをありのまま伝えようと努めた。そして、それに対し、生徒一人一人が自分なりの評価や今後のあるべき支援の方向性などを考えていけるように心がけた。しかし、ありのままの支援の現状を伝えようと努めても、そこには私自身のJICAの支援に対するプラスの評価というフィルターを通してしまっているため、生徒にも一定の価値観の方向付けをしてしまったという反省は残る。今後は、生徒がより多面的・多角的に日本の国際協力のあり方について考え、評価し、自分の行動につなげていけるように、より多様な資料などを用意していきたい。

10 教師海外研修に参加して

「百聞は一見に如かず」という一言に尽きる。社会科は「社会認識の育成を通して公民的資質を育成する」というねらいがあるが、その社会認識に関しては、教科書や資料集の説明や資料をもとにした認識に留まることが多い。しかし、教師海外研修に参加して、実際に自分の五感を使ってアフリカ州を認識し、それを生徒へ伝えることで、生徒も教科書や資料集以上の現実味のある対象としてアフリカ州を認識することができた。そして、それを土台として、変化の激しく多様な価値が混在するがゆえに一つの答えがない国際社会で生き抜くための公民的資質の基礎を培うこともできるのだと考える。また、本研修で出会うことができたJICAスタッフの方々や現地でボランティア活動をする方々の生き方は、道徳や特別活動をはじめ、生きる力の一つである豊かな心を育成する場面で、大変貴重な生きた教材として活用させていただくことができると考えている。

最後に、国際社会に生きる子供たちを育てていくためには、教師自身が常に世界に目を開いて、多様な価値を受け入れ、学び続け、変化し続けていかなければならないことを再確認することができた。